

幼児期前期の絵画製作

— 1～3歳 —



角 尾 稔

はじめに、考えておかなければならないことが、二つある。第一は、発達の個人差ということであり、第二は、発達をとりあげる観点である。

発達の個人差

いうまでもなく、発達は、個人の遺伝的特性と、その個人の環境つまり経済の相違によって、発達の姿は違ってくる。ここにとりあげようとする、絵画製作の発達も、遺伝と環境の影響のもとにあるものであり、厳密には、個々の幼児が、それぞれ違った発達の道筋をたどっていく。そうした個人差をふまえた上で、一応の、まず一般的なと思われる発達の姿を提案しようとするものである。

発達の観点

発達にもなって変化する子どもの姿を、どんな観点からとらえるか、その観点、角度が一つの問題である。色や形の再現、目と手の訓練といった観点から、幼児の絵画製作の発達をとらえようとできようし、幼児の生活や思考の関連から、絵画製作の発達をとらえることもできよう。本稿では、可能な限り、総合的な観点から、発達をとらえることができるように、いろいろな観点から、幼児前期（一～三歳）の絵画製作の発達を追ってみることにした。

描画の発達

三歳までの描画は、描画の発達段階からみれば、なぐりがき

(scribbling) の時期である。錯画期、乱画期、撮筆期とも呼ばれる。なぐりがぎの時期は、表現様式の上から、さらにいくつかの時期にわけられる。

エング (Eng) は、その著「児童画の心理」において、

(1) 波形乱画期

(2) 円形乱画期

(3) 混交乱画期 (ジグザグ、直線、角、楕円、ラセン、輪形、短形、波形、手書き文字の真似などの乱画がはいる)

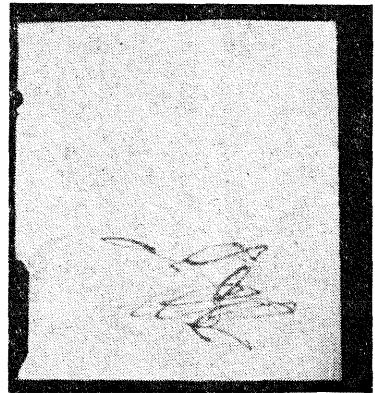
の三つの時期を設けている。

波形乱画期

はじめての描画には、その様式の上で規則的な動きが見られない。子どもは、多分その時までの経験の上から、鉛筆なり、クレヨンが、描くことのできる材料であることを知って、模倣的に字をかくしぐきをする。そしてそのしぐきの痕跡としてあらわれる、線の出現に驚き、喜び、描画運動がくりかえされる。

さて、こうした描画運動の中に、一つの特徴的な動きがあらわれはじめる。手を左右に動かすことによってできる波形の弧状の運動である。

なぐりがぎの時期の特徴として、幼児期はその描くときに、はっきりとした再現的な意図をもっているように思われぬ。エング



はじめての描画 (1歳1ヵ月)

は、なぐりがぎを、

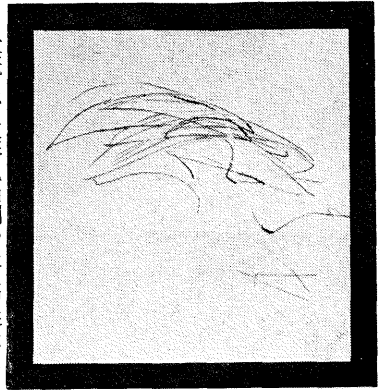
「非再現的、非裝飾的自由描線」と、明快な定義を下している。

しかしながら、この時期の幼児ははっきりと言葉で伝達のできないのであって、何らかの意図ないしは、描く

活動の中に感覚運動的な連想をもっていることが想像されることである。なぐりがぎをしている間、何を言わんとしているかつかみとれないながらも、ブツブツつぶやいているのは、無目的なしぐき、運動とは違った意味があると考えていいであろう。

比較的言葉の発達していた筆者の姪は、一歳七ヵ月で、波形乱画のなぐりがぎをしながら、「ブーランコ、ブーランコ」と、あたかも、自分がブランコにのってでもいるような調子で、腕とともに身体全体を左右にゆすっていた。もちろん、最初からブランコの絵を描こうとしていたのでもない。描画動作の感覚運動的経験を結びつけているのである。

ともあれ、大局的にみて、この時期は、何を描こうという目的を明確にもったものではなく、むしろ、エングやローウェンフェルド



波形乱画期 (1歳5ヵ月)

(Lowenfeld) のいうように、無目的な活動であり、運動神経の調整に対する欲求のあらわれといっているであろう。

円形乱画期・
混交乱画期

大概是、波形乱画期の後に円形があらわれてくる。波形は左右に弧をなしているが、この時期に弓形が発展して曲りなりにも丸形となつてあらわれる。

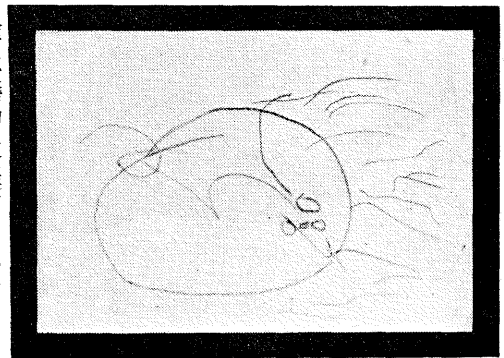
そして円形の乱画を描きはじめると、子どもは喜んでくりかえす。しかも自分の経験と結びつけて、何を描いたかと聞くと描いたものに命名する。

大概是、「人」である。母親、父親であつたり、自分であつたりする。

円形乱画があらわれて間もなく、円形の乱画と、直線とが入り交つて、複雑な表現となつてくる。

丸がいくつも重なつて、その上を直線が入り交つたりする。その丸は時に人の顔であり、時に乗り物であり、車であり動物である。

顔の輪郭らしいものの中に、定まった位置を占めずに、あちらこ



顔の絵髪、目、鼻、口、メガネのつるがかかされている

ちらに、小さな丸が描かれて、それが目であり、鼻であり、口であつたりする。目や、口の出現は、鼻や耳に先だつて、しかも、新しい対象の鼻や耳が描かれると、従来のみや口がゆがんで、定着するまでに、ある程度の時期を必要とする。

(上の写真は二才八ヵ月)

さて、描画の発達は、明

確に段階的に発達するものではなく、円形乱画期になつても、波形の乱画は描かれるし、このさき図式期に入った後も、乱画は、ちょくちょく描かれる。一般に三歳半ないし、四歳頃までは、——特別に指示して描き方を教えなければ——乱画期が続くものである。

活動・素材別に見た興味の発達

幼児の製作活動の発達についての研究は、描画の発達研究にくらべて、その数が少ない。思うに、描画の場合は、描画材が、鉛筆・クレヨンにせよ、水彩絵の具の筆描きにせよ、フェルトペンによる表現にせよ、いずれにしても、さして広い範囲ではない。大局的に

は描画材の相違によって、表現の様式や内容に大きな相違があるものではなく、したがって、描画発達的全体的な姿をつかみやすい。

しかるに、製作活動の発達は、その素材の範囲も広い。ちょっとあげてみても、紙製作、粘土、積木、砂、自然物等々いろいろの材料がある。最近こそ少なくなったが、かつて幼稚園の製作といえは、折紙、豆細工、キビガラ細工といったものについても、考えるなら製作の発達の範疇に入ってくる。したがって、一つの素材での製作活動の発達は——その素材に対する技術の違いに影響されるため——他の素材での製作活動と、直接関連づけてとらえることが、ある程度困難である。

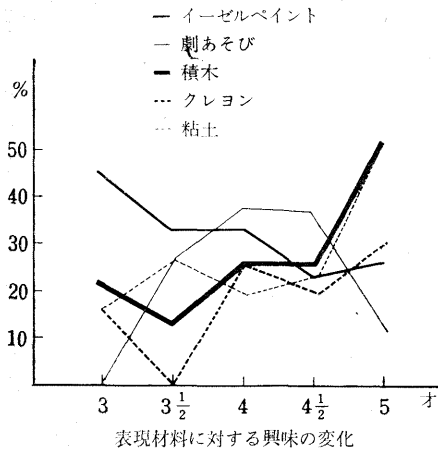
したがって、技術に重点を置いて製作の発達をとらえようとするならば、個々の素材別に製作活動の発達の姿をとらえていかななくてはならない。製作活動にあつては、その技術の発達にともなつて、複雑で変化に富んだ製作活動が、期待されうるのではあるが、そうした技術の面の発達にのみ重点を置くのは、視野が狭く、幼児の絵画製作の意義や目的の上からも、不十分な見方といえよう。つまり製作の発達を、子どもの全人格の発達と関連づけて、とらえられなければなるまい。

絵画製作材料に対する興味の発達

絵画製作の興味の発達を活動別——したがって、材料別に検討し

てみる必要がある。このことについては、アルシュローラーとハットウック (Alchuler, Hartwick) がその著「絵画と性格」の中で、興味深い資料を提示している。

左の図は、各種の表現材料・活動に対する幼児の年令的推移を示した表を図に示したものである。この図でわかることは、イーゼル・ペイントへの興味が、下降していくのに対して、クレヨン興味は、上昇していくこと。積木や粘土への興味は、四歳までは、イーゼル・ペイントへの興味より低いが、四歳半を境にして、後には最も好まれる絵画製作、ないしは表現活動となつていくことである。



それぞれの材質には、それでもって誘発される活動に質的な相違がある。アルシュローラーたちは、水の具とクレヨンとが、実際にどんな子どもに、どのように使われるかを比較して、クレヨン——線

が強く、青の表現する傾向が強く、青の

ような寒色によって表現する傾向、描写したり、描いたものに
確率的に命名する傾向が強い。

水絵の具——線や形よりも色の塊によって表現する傾向が強く、
クレヨンより暖色が使われ、非描写的で、描いたものに現実
もとづくよりも、自由連想的な命名をすることが多い。
としている。

さきに示したような、好みの年令的推移を示すのには、それぞれ
の年令の幼児の生活や性格の推移と符号する点がある。

水絵の具は、言葉にあらわせない要求不満、葛藤を表現するのに
適している。それ故、二歳から四歳までの幼児の象徴的に自己表現
をする材料に適しており、そのため、この年令の幼児に好まれて
いることが、推理されるのである。また、水絵の具は、粘土や、フ
ィンガーペインティングに比較して、やや小さい材料であるこ
とは注目されている。

粘土は（フィンガーペインティングも同じであるが）材料で直接
的に自己表現するのに適しており、その素材を扱いつながら、言葉に
も出して自己を表現する。素材を使って表現するというより、素材
を扱う過程に、いじくりまわしている活動に、自己表現の喜びがあ
り解放感も味わえるのである。この点、クレヨンによる表現に比較
して、水絵の具とともに、粘土やフィンガーペイントが年少児に好
まれる性格をもっているといえよう。

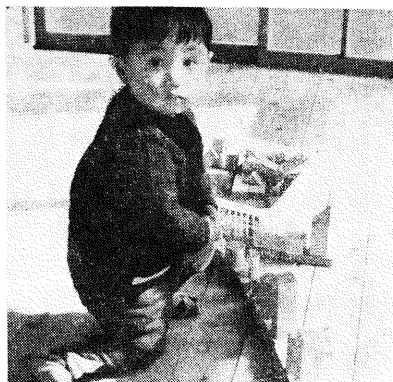
積木の活動は、早くから、クレヨン以上に好まれ、材料を操作す
る喜びを満足させるといつていい。幼児の年令が進み、操作する能
力がついてくると、単純な積木よりも、組み木、レゴの類、さしこ
み玩具（キャップトイなど）が好まれるようになっていく。しかし
この稿では、一応三歳までの発達を中心であるので、ここではこれ
以上ふれることをやめよう。

積木活動の発達

いろいろの製作活動のそれぞれについて、年令による活動の推移
を明らかにしていくことができようが、ここでは、もっとも普通な
積木の活動についての発達を私の子ども（男）の成長からふりかえ
ってながめてみよう。

一歳を過ぎる頃、積木を与えられた幼児は、それを運んだり、投
げ捨てたり、他の積み木とまぜあわせたりする活動がみられる。や
がて、積み木が、重ねられることに気付き、一歳半頃には、七・八
個の積み木を重ねてはこわし、倒れるのを喜んでいるかのような遊
びをしている。

左右対称に配列したり、積んだりすることの興味は、二歳頃から
すでに芽生えはじめている。塔を作る時、左右の重量を判断して積
み重ねることを覚えるし、大きな積木と小さな積み木を交互に重ね
たり、列べたりする試みにもあらわれてくる。橋を作ったり、囲いの



2歳頃の積木電車

ようなものを構成する企てが、二歳〜三歳の間にあらわれてくる。そして、二歳を過ぎる頃には劇的な遊びに積木を用いはじめめる。左の写真は、二歳二か月で、ならべた積木の上に、一本ずつ立てて電車だといっているところである。

ゲゼル (Gesell) が示した成長の勾配の中から、積木に対する興味を拾ってみると、

一歳半——積木を室中もち歩く、つきませる。「立てる」あるいは、四つ重ねて塔を作る。

二歳——一列にならべる。あるいは巧みに運搬車の中に積み込む。色のついている積木、あるいははがいはめ込むようになっていいる積木を好む。

二歳半——垂直または、水平の建物をつくる。建造物に名前をつける。

三歳——形状、大きさにいろいろ変化をもたせて建物を作る。積木に汽車をつなぐ。作りあげたものを持ち歩

積木活動 (Slater)

積木作業の水準	2歳	2.5歳	3歳	3.5歳	4歳	4.5歳	合計
塔を建て、倒れるまで	3	9	4	0	0	0	16
稚児の塔を積み重ねる	1	5	7	9	3	0	25
汽車の構造を認める	0	1	6	1	4	2	14
構成員、家、線路など	0	2	2	1	2	2	9

いて遊ぶよりは、つくることそのものを楽しむ。

積木の活動を、いくつかの種類にわけ、年齢によって、どんな活動がなされるかを統計的に計算した資料は、少ないが、スレーター (Slater) の記録は、参考になる。ここでは、積み木の活動を、大きく四つに分け、構成員の頻度数が示されている。

以上で一歳から三歳ま

での絵画製作を数種の角度からながめた発達についての論を終るが、これははじめにもことわった通り個々の幼児がそれぞれ違った道筋をとることを忘れてはならないし、その目その時の子どもの情緒の状態、とか興味のあり方でも又変化を示すものであることはいうまでもない。